

身仏粧魔

塔三代願悲

歌恨長戸江



吉川英治全集

第21卷

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

講談社版

吉川英治全集・21 魔粧仏身 悲願三代塔

江戸長恨歌

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式會社 講談社

東京都文京区音羽二―二二(大代表) 郵便番号 一〇二
電話 東京九四二局二二二〇
振替 東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式會社

製本所 株式會社 大進堂
本文用紙 日本バルブ工業株式會社特濫

第一刷発行 昭和四十四年十二月二十日

定価 六百八十円

© 一九六九年 吉川文子

目次

魔粧仏身

一

悲願三代塔

一七

江戸長恨歌

三二

さしえ

伊藤彦造

(魔粧仏身)

山崎百々雄

(悲願三代塔)

山本武夫

(江戸長恨歌)

魔
粧
仏
身

裏 山 道

ばかりと、白い雲が、小猫のように遊んでいる。——箱根峠の空の碧に。

二月の昼だった。春はまだ浅い。

蘆ノ湖の汀には、薄氷が張っているし、双子山の南側にも、ところどころに雪がある。

『柳吉、油断いたすな。よう気をつけい——』

『お父上も、足元を、こらぬように』

『足元の雪よりは、後から追って来る関所役人の眼があぶないのだ』

『でも、もはや、この辺まで参りますれば』

二つの人影が今、双子山の肩を越えて、南側の巖へ這い降りて来るのが見えた。その足元から、雪や石塊が崩れるたびに、山ふところの静寂を大きな響きが走って、真下の沢の地獄池から、白い鳥影がバツと逃げ立つ。

『——あつ、もう道がない』

『だいじょうぶです。お父上、彼方の崖へ渡れば』
父子に違いはない。

互いに、手を伸ばして、援け合ってゆく姿が、いかにも必死であつた、骨肉らしかった。

ひとり、まだうら若い——十九か二十歳にしか見えない線のはそい美少年。もう一人は、その父親であろう、これは頑健な四十二、三の武士で、濃い眉毛や、逞しい骨ぐみなど、父子にしては、似ていない。

足擦えや、旅支度は、云うまでもなく二人とも凛々しかった。——だが、不審なのは、ここはふつうの旅人が通る道ではない。箱根八里の街道は、彼方の湖畔から、並木に添って、宿場へかかるのが本道で、こんな所には、何うして彷徨って来たのだろうか？

——すると、間もなく、

『やつ！ あれに』

と、山の肩から、大きな声がして、そこに又、四、五名の人影が立った。

すぐ彼方の湖畔には、有名な天下の関門、箱根の関所がある。そこから手分けをして追いかけて来た関所役人の一隊に違いなかった。三名の足軽は、棒をかかえ、一人の同心は指さして、すぐ眼の下に見た父子の武士へ向って叱咤した。

『あいつだ、関所破りはっ。——逃がすなっ』

同心亀八

振り仰いで、父子の武士は、

『——あつ。見つけられたか』

岩蔭に身を潜めたが、もう遅い。

『柳吉、こうなつては、ぜひもない。そなたは先へ逃げる。』

——なかに、四人ぐらいな相手、わし一人で沢山だ。父は後からすぐ参る。そなたは早く先へ駆けろ』

『でも、でも……お父様』

柳吉と呼ばれた美少年は、父にも似ず、歌舞伎役者のように優しいだけだった。もう眼に涙をたたえ、おろおろ声で、父の腕に縋りつく。

『ええ、何を愚図愚図、この期になつて!』

魚住十郎太は、思わず声を励まして、突っ放した。酷い腕には見えたが、実は、子と思う父の最大な愛であった。

——と、既に頭の上から近く、

『関所破りッ』

『待てッ』

ぎ、ぎ、ギッ——と足に蹴崩されて来る土塊と、関所方の四、五名が駆け降りて来た。

同時に、柳吉のあわてた足元へ、ぶウンと樗の棒が飛んで来た。それでなくとも足場のあぶない傾斜である。——あッ、よろめくなり、柳吉の姿は、篠笹を踏みこみ、雪まみれになりながら、真下の湯の池のそばまで転げて行った。

魚住十郎太は、片手で岩角を抱えながら、片手で近づく関所者を斬りふせいでいた。彼の手にかかつて、もう二人の足軽は、朱になつて、崖から下へ、のめり落ちて行つた。

『——退くなつ。これしきの相手に恐れたと云われては、お役目も立つまい。天下のお関所を預かる小田原の恥辱でもあるぞッ』

組頭らしい一名の同心は、そう言つて、部下の足軽を励ましていたが、血に怯じた組下共は、わらわらと逃げ散つて、そこにはもう魚住十郎太と、その同心と、二人しかいなかった。

『曲者ッ。——動くまいぞ』

同心は、小田原藩の岡本亀八という侍だった。

鬢の毛にはもう白いものが見える年頃だし、職分もひくい関所同心に過ぎなかったが、学識もあり武芸もある武士として、大久保加賀守の家来のうちでは、同僚からも組下からも、常に尊敬されている人だった。

彼方の岩角と、此方の岩角と、崖のあいだを隔てているので、亀八は、刀の下緒を取つて、樗にかけながら、

『そこの浪人者に物を申す。——今、この下へ落ちて行つた汝の連れは、男姿をしておるが、真は女に相違あるまい。——明らかに女として通る者でも、女性の通過は、殊のほか厳密なのじゃ。そちも武士であるからには、それ位な事は存じておろうが。……それを、男に偽装して通ろうなどとは、公儀をおそれぬ曲者』

樗の結び目をきゅつと締めて、袂の下に廻し、岡本亀八は、刀の柄にしめりをくれながら云い放つた。

『——御法に伏して、縛に就くか。——それとも、手抗いして、この亀八の一太刀をうけてみるか。返答せいッ』

脅しではない。

年こそ老っているが、岡本亀八は、その返答次第では、彼方の岩角まで、飛びかかって行きそうに、額の青筋を太らせて突ッ立った。

『……………』

楯——相手の魚住十郎太が、それに対して、何う答えるかと思っていると、十郎太は、悄然と、頭を垂れて、囁て云った。

『あいや、暫くお待ちねがいたい。どうやら、物分りのよきそなたの御老人——とお見かけ申してお縄りいたす。いかにも、天下の大法を存じながら、お関所方の眼をかすめて、娘を男妾に仕立て、関所を抜けたに相違ござらぬ』

『……うむ！ さては』

『だが——これには、仔細のある事です。今、その事情は申しあげられぬが、拙者は、元佐賀の藩士で、魚住十郎太という者。——目的の地へ参って、親のつとめを果たした後は、必ず、再びここのお関所へ参り、尋常にお縄をうけましよう程に、何とぞ武士のお情、今日のところは、お見のがし下されい』

『ば！ ばかな事を！』

と、亀八は、かえって怒った。

『われわれの眼に観破されて、追いつめられたればこそ、武士の情の、後で縛につくのと、しおらしうな事を云うのであらうが、もしこの儘、関所の者が追って来なかつたら、舌を出して、逃げ失せたに相違あるまい。——さ、縛につくか、手抗いするか、十郎太とやら、いずれにせよ、もう遁れぬところだぞ』
『この上は、せひもござらぬ。拙者も、関を破って通るからには、元より、万一の場合は覚悟の前——』
『なにをッ。——遣るものかッ』

岡本亀八は、先に崖を駆け下りて、湯の池の側に突っ立ち、上から降りて来る相手を待ちかまえていた。

湯の池地獄

双子山の裾に抱かれている湯の池は、地獄池とも呼ばれていた。赤土を溶いたようなどろんとした水へ、手をさし入れてみると、冬でも、人肌ほど温かい。

ぶつ……ぶつ……と池の底から不気味な湯の泡が噴いていく。従って、この池の畔には、冬でも雪が積もらなかった。春先になると、緒い江には、どこよりも早く、若菜や土筆が萌えだした。

——先刻、篠笹の雪に迂って、転げ落ちた魚住柳吉は、池のふちに、俯つ伏したまま、氣を失っていた。

関所同心亀八は、そのそばに突っ立って、

『十郎太ッ、覚悟はまだか』

と、再び声をかけた。

迂り落ちたら——それ迄である。十郎太は、大事を取りながら、静かに篠につかまりながら、崖の一端から降りて来た。

『もいちどお願いしてみるが、岡本殿とやら、お見のがしは成るまいか——何うしても』

『くどい！』

一喝しながら、岡本亀八は大刀を払って、
『私情をもって、天下の大法は曲げられぬ。——例えいかような事情があろうとも！』

『よしッ、頼まぬッ』

びゅーッ——と不意に眼に見えぬものが唸った。はっと亀八は身を退いたが、胸先を流れた白い切っ先に、袴の紐がぶつくと斬られていた。

職掌と威権と、天下の掟をうしろに持って、亀八には強い信念があった。——退こうなどとは露ほども思わなかった。おのれと、烈しい怒りを肩に燃やして、彼の刃も、途端に、十郎太の手元へ斬り込んでいく。

だが、十郎太の剛健な腕ぶしとは、到底、比較にならなかった。二太刀か三太刀、白光の火を太陽に降らしたかと思うまでに、岡本亀八は、前へのめって、湯の池の赤い沼土にすべって、だっ——と水際へ横に倒れた。

『ぞ、ざん念ッ』

叫びながら、相手の顔を睨めつけた瞬間、十郎太の刃は、余りにも深く——その真肩間から顔を通して、肩のつけ根まで斬り下げてしまった。

『……ああ』

血に酔ったように、十郎太は太刀をぶらさげたまま、暫く茫然としていた。湯の池の水は、沸いていた。地獄の血のように赤かった。

『わが子の為なら、是非もない。そうだ、逃げた者の口から、すぐに又、ここへ討手が来るに極まっている。……お柳、お柳ッ』

十郎太は、気を失っているわが子を抱いて、池の赤い水を含ませた。男娼に扮らえているので、当然、名も柳吉と呼んで来たのであるが、今はそういう要心まで忘れ果てていた。

『……確乎りせい、お柳ッ、わかったか。父だぞ、父はお前を

抱いているぞ』

彼の声には、強い愛情がこもっていた。父ならではの無い愛涙の進しりがあった。

——気がついたらしく、お柳は、眸をあげて、うつつに父の膝から父の顔を見つめていた。わが娘ながら、何という清纯な眸だろう、麗しい唇だろうと思う。

（……オオ、鷹松家の花嫁。……そなたは、こんな姿をしている、飽くまで、心のとおり美しい花嫁御寮だ。——もう箱根の関を越え、智殿のいる江戸は近いぞ。もう少しの辛抱じゃぞ）心のうちで云いながら、十郎太も、ここまでの旅や、ここまでの半生を振り返って、思わず臉に涙をためた。

ふたりは、父一人娘一人だった。

この年頃まで——男手で育てて来た十郎太には、お柳に対して、父であると同時に、母の愛に似たものを併せて持っていた。

そして既に、お柳には、かたく約束した未来の良人があった。上野の宮様に仕える寛永寺の寺侍で、鷹松第四郎というのがその人である。

そういう立派な良人へ嫁ぐ身なのに、なぜこの父娘は、関所抜けの大罪などを犯したのか？ お柳を男娼になどして歩かせなければならぬのか？

そこに深刻な人間苦と、激しい時勢との相剋があった。

男装の花嫁

幕府を支持するか。勤王方に味方するか。

今の社会は、この二つに分れていた。一人の君公の下にある藩さえも、その二派にわかれて、争いは滔々々々歇まない。

魚住十郎太も、佐賀勤王党のひとりりで、同志と共に、去年藩を脱走し、京都や大坂の間に、暗躍していたが、

『そうだ、お柳も今年は二十歳になる——』

と、故郷にのこしてある一人娘の身を思い出した。

(二十歳になったら妻にあげましょう)

男と親とで、三年以前、固く誓い合っている人物がある。

お柳がまだ十七歳の時。

魚住十郎太は、江戸詰であつたので、江戸には多くの知己もあつたが、その中の鷹松第四郎という者に、根氣よく望まれて、遂に婚約してしまつたのである。

(三年お待ち下さるならば——)と。

その三年目が、もう迫つた。お柳はこの春で二十歳となつた。可憐しいほど、嫁ぐ日を待ちぬいて来た彼女の爲にも、父の十郎太は、何としても、この大きな親の任務を仕果さねばならなかつた。

——だが、ここに困つたことは、十郎太も今は脱藩して、国事のために、流浪している身であつた。華やかな嫁入支度はおろかな事、お柳を江戸表へ連れて行くにも、藩から関手形の下附される筈もない。

又、密偵や志士の潜行が烈しいので、各地ともに、関所の往來はこのところおそろしく厳しく、わけても幕府の政策として、女子の通行には、特に厳密な眼を光らせている時節でもある。

太宰府の親戚の家に預けてある娘をたずねて、お柳の決意を糺してみると、彼女はもう、生涯の良人は鷹松第四郎と心に決

めて、この三年を待ちこがれていた程なので、何んな艱苦を冒しても、江戸表へ出たいという。——さもないければ、生涯、良人を持たずに、草の庵に尼として身を終つてしまいたいとも云つて、父の膝に、よよと泣き濡れてしまふのであつた。

(そうあるのが、女ころだ。当然な貞節だ)

十郎太は、むしろ欣しかつた。

自分としても、武士と武士とが、三年後には嫁げましょう、と固く誓いを立てた事。

(先方でも、何んなに待つておるか知れまい。——それほどに迄、覚悟ならば)

十郎太は、お柳に男装せよと命じた。お柳は、惜気もなく、黒髪のを縮め、髪も若衆髻に直し、義経袴に大小を横たえて、旅立つ父の後に従き、東の空をいそいそと望んだ。

男装の花嫁は、そうして、新居の関も通り、馳て今朝——この箱根峠にかかつたのであるが、さすがにここは有名な天下の第一関、殊に時節がら、通行の怪しい者は、髪元結を解かせ、肌着の下まで検めるといふ厳しさと、三島で聞いた。

で——魚住十郎太は、絶望を感じた。

(駄目か?)

と、一時は心を晦くしたが、未来の良人を思い慕つて、道中の辛さも、艱苦も忍んでいるお柳のすがたを見ると、たまらない可憐しさを覚える! 親心の脆い情愛がつき上げてくる!

(いずれは、御国のために抛うつ生命。——その一命のあるうちに、せめてこの娘の身だけは、第四郎殿に行末を頼んでおきたい。さすればもう、この世に残す氣がかりもないし……)

十郎太は、そう云つた氣持で、遂に関所抜けの肚を決め、道もない裏山伝いに、この近傍まで辿つて来たのであつたが——

そこには絶えず、山見付が立っている。当然、見つけられて、幾度か血路をひらき、そしてやっと今、この双子山の湯の池まで斬り抜けて来たわけであった。

『……もうよい、もうこれからは、幾筋の道もあるし』

十郎太は、娘のお柳を慰めるべく、そう呟いたが、ふと、辺りの血しおを見廻して、

『だが、思わず、多くの殺生をしてしまった。……この老人まで』

と、岡本亀八の死骸をさし覗き、ゆるして下さい、と両手をつかえた。

何の怨みも遺恨もないのに——この職務に忠実な老役人を手に斬って——と、魚住十郎太は心から詫びて、彼の死骸に、いつ迄も、合掌を捧げて、悔悟の眼を閉じていたが——

『おお……』と、ふと耳を敏て立ち上ると、わが娘の愛に、その眼は又、鬼のように険しくなっていた。

『追手の声だ。——先刻逃げだした足輕共が、ほかの人数をつれて来たに違いない。お柳っ、わしの背につかまれ。早く、わしの背に廻って肩にすがれ』

ためらう娘を、叱り励まして、十郎太はお柳を背中に負った。そして湯の池の畔を、獣の逃げるように駆け出した。掻き分けて行った声の折れが、白い一筋の波となって見えた。

絃歌の軒へ

湯の池地獄は、どんよりと、赤い漣をたてていた。

——そこに、何事もなかったように。

だが、それから間もなく、

『オオ、あれに。——亀八先生が斬られて！』

山の上から、又中腹から、わらわらと駆け集まって来た関所役人の群れに、この静かな山の盆地は、忽ち、凡ならぬ騒ぎに掻き乱された。

『はやく、医者と呼ばへ。——箱根宿の玄庵殿を連れて来い』

『もう、間にあいますまい。このひどい出血では』

『戸板はないか』

『そう叫ぶ者があるし、又一方では、

『傷負いよりは、逃げうせた下手人を引っ捕えるのが急務ではないか。——誰か、追って行ったか』

『街道の方へ、二十名程——。又、山の方へも、ふた手に分けて、四十名ほど繰出しておきました』

『足るまい！ そんな人数では。——そして又、早馬で、宿場宿場へも報らせを打ったか』

『遣わしました』

『御城下へも』

『はい。即刻、木戸口を檢めるようにと』

すると又一人が、突然、思い出したように呟鳴った。

『あつ。忘れていた。余りの狼狽に、つい失念していたが、御検屍の届けと同時に、この事を、誰よりも先に、岡本家の息子に報らせておかねばならなかった』

『そうだ。あの源治殿に』

『なんじゃ、まだ使いを走らせてないのか。では早く誰か、この事を、源治殿まで——』

急ぎ立てると、一人が使いに立ちかけたが、ふと足をためら

わせて、

『——だが、源治殿は、城下の屋敷にはおるまい。恐らく、又何処かに、遊び暮しているだろうが?』

『……ウウム』

と、人々は、そこに仆れている悲惨な亀八の死骸に眼を落しながら、その亀八の嫡子の一人の遊蕩児を思い浮かべ、何ともいえない重苦しい気持ちになった。

『——ま、とにかく、湯本の花屋か紀之国屋あたりへ行つて、源治殿がいるかいないか、聞いた上で、もし居なかったら、御城下の屋敷まで、申し告げておけばよろう。それでも報らせが届かなかつたら、やむを得ない事だ』

『では、行つて来ます』

籠へ向つて、使が早馬を飛ばしてゆく頃、岡本亀八の死骸も、戸板に移されて、関所の方へ、とぼとぼ運ばれて行つた。

×

×

×

×

いったい小田原藩という所は、余りに天恵にめぐまれ過ぎていた。

海浜は近いし、土地は豊饒だし、その上、気候は申し分なく、城下から一里の箱根連山には、いたる所から滾々と温泉がわき流れている。

二百余年來の泰平に馴れて、藩士の風も、遊惰であつた。岡本亀八のような真面目な人物は、鄙い方であつた。天下の往還に當るので、城下には、金は落ちるし、温泉町には、脂粉のにおいが濃い——従つて、いくら時勢が騒がしくなつても、この城下には、まだ生々しい勤王佐幕の血しおが流されていない程であつた。

『——おいっ、花屋の者。——おいっ!』

早馬を止めて、軒先からこう高く家の中へ、使は吸鳴った。湯本の花屋という温泉宿である。

使の者の額も、馬の背も、汗に光っていた。生憎、帳場に誰も見えなかったが、ふた声三声、高く云うと、二階の三味線の音がやんで、欄の端に、白粉の女がちょっと顔を出した。

『あら、おかみさん、何だか下で、馬に乗つたお侍さんが吸鳴つていますよ』

『え。お侍さんが?』

どやどやと、おかみや女たちが降りて来る。使の者は、腹立たしげに、

『岡本源治殿は、ここに遊んでおらんか。——亀八先生のお息子だ』

訊ねると、おかみも雇人も、ちよつと返辭を洩っているふうなので、

『かくしては相成らんぞ。平生の事とは違ふ。——今この先の紀之国屋で訊ねたところ、多分、花屋に遊んでいらつしやる筈だと申しておつた。つつまず申せ、源治殿のお父上の身に、

兇変が起つたのじゃ』

『はい……あの源治様は、いらつしやる事は居らっしゃいます』

『然らば、早く、唯今此方の云つたことを取次いで来い。すぐ御案内申しあげるから、拙者は、軒先で待つておる』

使は、馬の背から降りなかつた。手綱をつかんだまま、それだけ云つて、軒先に控えているのである。

家の中へ入つて、岡本源治に直に話すことが当然なのは知つてゐるが、父の非業な死も知らずに、この白粉くさい空気の中

で、何んな姿をして遊蕩しているかと考えると、そんな席を見るのも嫌だし、見られる源治も辛かろうと察したからであらう。あわたたしい聲音が、奥へ駈けこんで行くと、驢て、父の兇報を聞いて、吃驚したらしい岡本源治が、あたふたと、奥の廊下から店頭へ駈けだして来た。

『草履、草履。——わしの草履はどこだ、はやく出せ』
と、その声も、履物を求めている眼も、もう狼狽えて、たつた今し方まで、酒に溺れていた顔も、蒼白く変っていた。

落馬息子

黒地の玉縮の、華奢な平帯を横目に結び、提げ刀をしている袖口から、襦袢の派手な色気がこぼれている——

色は小白いし、背は高いし、鍛えれば申分のない骨格をしているが、年は二十六、七歳にもなりながら、まだ部屋住み同様な氣持で、遊蕩にばかり耽っている怠け者だった。

(岡本家は、鷹の子に裔——)

と、陰口が評判なので、然るべき家柄にも関らず、嫁の話もまだないという困り息子なのである。

『ああ、いけないいけない。座敷へ、印籠と鼻紙を忘れて来た。はやく取って来て呉れい』

やっと、草履を穿いたかと思うと、岡本源治は、まだそんなことを云って、花屋の土間にうろうろしていた。

使の者は、馬上から振り向きながら、

(あれが亀八先生の御息子かと思うと涙がこぼれる。さだめ

し、岡本亀八様も、これでは死んでも死にきれまい)

と、面を反らして、嫌な顔をしていた。

漸く源治は外へ出て来た。

そして使の者から、もう一度、父の死を審に聞かせられて、土のような顔色になったが、

『——ではすぐに、お供をいたしますが、父の死骸は、どこに置いてございますか』

『一先ずお関所までうつして、御検屍をお待ち申しておる。時遅れては、日も暮れます故、あなたも馬にお乗り下さい』

『はっ……。馬に？……成程。そういたしましょう』

花屋の若い者が駈けて行つて、すぐ近くの間屋場から、脚の迅そうなのを一頭曳いて来る。

『では行つて来る』

と、源治は、馬の背に移った。

何事が起つたのかと、案じ顔して、今まで一座していた妓たち、二階の欄干から源治の姿を見送っていたが——さすがに源治も心に咎めているのであらう、それには振り向きもせず、使の者の後に従いて、駒の脚をいそがせて行つた。

須雲川に添つて、峠の道はだんだんに登りへかかる。

使の者の早馬は、篠を鞭にして、憂々と駈けだして行く。

——源治は、馬術にも不鍛錬なので、
『もしもしっ——。余り急がないでください。この馬は、癖がわるいので、拙者を振り落しそうにして困る』

と、後で悲鳴をあげた。

使の者は、舌打ちして、

『日が暮れますぞ。はやく来られい』

『弱った……どうも自由にならぬ』

『では、馬を取換えて進ぜる。これへお召しなさい』

『辱けない。これならば』

『ほかならぬお父上の兇変、一刻も早く駆けつけられぬと、あなたの面目もございますまい』

『そうです。御検屍の来ないうちに、参っておらねば、恰好がわるい』

『その馬ならば、もう宜しかろう。これから先は、道もだいぶ平地になる。さ、一鞭当てますぞ』

先の駒が、勢よく駆け出したので、源治もやむなく、鞭を振ったが、途端に、彼は馬の背から振り飛ばされて、草むらに腰を打ちつけられた儘、

『——あつ、しまった。お使、お使、待ってほしい、待ってほしい』

と、叫んでいた。

悔悟の子

どつぷりと——宛ら一幅の墨絵のように、松の湖畔は暮れかけていた。

暮れると急に、山の上は寒い。夕富士の銀を吹き研いで、二月の風は湖を渡って来る。——蕭々と、松は鳴り、芦は鳴り、水は鳴る。

『おおいっ、お使——』

岡本源治は、馬の背にしがみつかながら、息を喘らして、先へ行く使の侍に又声をかけた。

『何処ですか。何処でござるか。——父の死骸が置いてある場所？』

馬達者な使者の男は、振り向きもせず、

『お関所。お関所』

云い捨てた儘、猶、駒をはやめて駆けで行った。

途中、何度も落馬したので、源治は体じゅうが痛んでならなかった。

然し心の裡では、

(父が死んだ。ほんとに死んだのであろうか?)

愕きと、疑いと、そして種々な考えが絡合つて、半ばはまるで無我夢中なのだ。

やがて、関所の柵が見えた。いつも見る黒い大きな門の傍には、提灯の光りが物々しくかたまっている。源治は胸の中で、(しまった! もう御検屍が来ている)

と、当惑して、思わず身ぶるいを禁じ得なかった。

案のじよう、源治がそこへ駒を繋いで駆け込んでゆくと、父の死骸は、戸板に乗った儘、関所の吟味所の前に置かれてあり、それを取り囲んでいる人々は、検屍役人だの、組下の証人だの、総て他人の顔ばかりだった。

源治を迎えて来た使の男は、

『遅くなりました。ようやく源治殿の居る所をさがし当てて、只今これへ召し連れて参りました』

と、辺りの者へ知れ渡るような声で囁きつた。

使者の男は、それで自分の弁解にはなつたらうが、源治としては、面目ないので、はッとそれへ坐って、両手をついてしまった。

検屍の役人は、じろりと見て、

『御息、源治殿か』

『はッ……。父が……。父が……。斬られたというのは、まったくでござりますか』

『それに、御死骸が横たわつておる。——酷い深傷じゃ、ただ一太刀しかない』

『オオ！……』

源治は、取り乱すまいと努めるように、拳を膝にふるわせた。

その姿を、苦々しげに、人々の眼は見入っていた。検屍役人も、腹立たしように、彼を見下してこう云った。

『お父上の死も知らずに、いったい今迄、何処においでなされたのか』

『申し訳もございません』

『その詫び言も、もうお父上の耳には通らぬ。——よう御覧なさるがよいぞ。亀八殿のこの無念そうな死に顔を』

平常から、源治の行状はみな知っている。こんな時といわぬばかりに、検屍役人は彼の良心を苛めつけて、更に、こう云い渡した。

『亀八殿の最期の模様や、屍体の傷痕、其他すべて、有の儘に、書上げました。書類はすぐ藩庁へ差し出すことになっておる故、これへ拇印を捺して、死骸を、お引取りなさるがよい。』

——追つて、君公のお沙汰があるでござろう』

提灯だの人影だの、周りの者がみな居なくなつてから、源治は初めて、父の冷たい体にしがみついた。

『——お父上っ、お父上っ。ゆるして下さい。不孝者の源治も、今日ばかりは、眼が醒めました。身も心も、ハツ裂きになる思いでございます。あなた様に向ける面もございませぬ。』

……ああ！ 何うお詫びいたしたらよいのか』

すると、吟味所の前にある巨きな松の樹蔭から、こう云った者があつた。

『嘆くな源治、返らぬことだ。——百万遍のお詫びよりも、其方が今、魂を入れ代えて、悔悟の眼をさましたことが何よりもよい手向。——忘れるなよ、今の懺悔を』

『……あつ？』

振り顧つて見ると、それは父亀八の実弟で——源治には叔父にあたる早雲寺の深音とよぶ禪僧だった。

恋の閉門

岡本亀八の葬儀には、城下の者、家中の者、挙つて彼の死を悼んで、その会葬も盛大に早雲寺で営まれた。

だが、それと共に、

『相手も分つておる事だし、源治殿は早速にも、藩庁へ仇討の願書を出しておられるだらうな』

と、葬式の日から囁かれ出した。

或者は、又云つた。

『いや、まだそんな物は出しておるまいよ。——何しろあの意気地のない息子殿では』

源治の叔父の深音は、他人のさきやきを耳にする度、（今に見ておれ）

と、胸のそこで、独り誓っていた。

けれど肝腎な岡本源治は、他人の眼にも頼りない程、この